

松下幸之助記念財団 研究助成

## 研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】野口真理子

【所属】(助成決定時) 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

## 【研究題目】

エチオピアにおける高齢者の老いをめぐる都市- 農村比較研究

## 【研究の目的】(400字程度)

近年、アフリカにおいても高齢者ケアに対する関心が高まっている。子の有無や経済状況、子の自発性の有無によって十分にサポートを受けられない高齢者の存在が指摘されるが、未だ「高齢化社会」ではないアフリカ諸国では、政策上高齢者は最優先課題からは外されがちであり、また高齢者自身の生計やケアの実践について具体的な観察を踏まえた実証的研究の蓄積は多いとは言えない。

本研究では、エチオピアの首都アジスアベバに居住する高齢者を対象に、社会における高齢者の生計や社会関係を規定する多様な条件を整理したうえで、都市において高齢者の実際の生活と社会的相互行為を記述し、かれらがどのような社会関係のもとで日常生活を営んでいるか、これまで調査をおこなってきた農村との比較を通じて解明することを目的としている。ケア関係が成立する社会的基盤を明らかにし、現代エチオピアにおける高齢化の課題を抽出する。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

他のサハラ以南アフリカ諸国と同様に、エチオピアにおいても国家による高齢者対策は都市部においてさえ非常に限定的であり、政府はコミュニティによる共助に期待を寄せている。これまで調査対象としてきたエチオピア西南部のアリの人びとが多く暮らす農村では、90年代以降、就学や就職、出稼ぎを目的とした若年層の都市部への移動が増加している。

これまでの農村での調査で、生業活動の大部分を他者に依存する高齢者であっても、血縁や姻戚関係にある人びとをはじめ、直接顔を見て会うということを重視し、その場において生起する応答的關係性に、かれらの生活が支えられていた。こうした關係性のあり方は、都市部に移住したアリの人びとにとっても共有されるのだろうか。農村で見られたようなこのケア關係が、都市という場においていかに変化しうるかを、(1)居住關係、(2)生業・生計手段、(3)生活様式、(4)日常生活を支える共助の存在と役割、(5)都市における他民族・他地域出身者との關係、または故郷の人びととの關係、に関する觀察・聞き取り調査をおこなった。調査にあたっては、これまで同様に、現地で調査地の人びとと關係を築きながら、調査対象となるアリの人びとが話す言語であるアリ語をおもに用いてフィールドワークを実施した。

また、首都アジスアベバには、高齢者支援 NGO がいくつか存在し、高齢者ケア施設でのサービスを提供している。調査ではアジスアベバ市内の3つの高齢者福祉施設を運営する NGO を訪問した。これら3つの施設はいずれも個人の慈善活動から発したものであるが、支援対象を高齢者だけでなく、障害者、精神病患者も含めた大規模な施設を運用する NGO、施設周辺の近隣住民や教会との関わりを強く有する地元密着型 NGO など、それぞれの施設は性格の異なるものである。それぞれの NGO の活動の詳細、入所者がその施設に至までの経緯、またそこで働く人びとに関して聞き取り調査をおこなった。

## 【結論・考察】(400字程度)

都市部に移住したアリの人びとは、政府關係職、大学教員などに従事し、給与所得を得る者が多く、数年ごとに転勤するなど居住地を変えることもあることから、その居住選択における社会關係の位置づけは低い

と考えられる。都市で職業を選択した者は、配偶者がアリでない者も多く、また日常生活においてアリ語を使用することはほとんどない。アリの人びとが重視する、顔を見せる行為を高頻度でおこなうことは難しいが、血縁等にある子どもが都市に出る際の住スペースの提供、アリの祝祭開催における積極的関与など、都市に住むアリとしての新たな関わり方が観察された。

また、アジスアベバ市内の3つの高齢者支援施設の入所者のほとんどは、入所前に路上で物乞いをしていた者であった。各団体に対して政府からの金銭的援助はなく、寄付金や海外からの援助金等での運用であった。学生ボランティアも多く、また施設訪問・見学受け入れや、結婚式等のお祝い事を施設で入所者を招いておこなうといったことも実施されており、各施設を中心にさまざまな人びとが集まり関わりあう場が構成されていた。